



一貫コース通信

魔法のメソッド

先日、英文法は「プラモデルの説明書」という記事を目にした。

プラモデルの箱を開けると、パーツが入っていて、そのパーツを見ただけで、どれがどの部分になるのかは、組み立てなくても大まかな見当が付く。説明書を見ずに組み立てることもできる。それと同じように、英文を見ただけで、単語の意味から大まかな文章の意味を理解できる。文法を知らなくても、単語を見ただけで文章の意味が取れる。しかし、複雑になれば話は違う。プラモデルが複雑になればなるほど、説明書通りに組み立てる必要が出てくる。「これはこうだろう」とパーツを組み立てた結果、実は順番が違って、他のパーツと組み合わせられなくなった、という可能性もある。それと同じように、英語も文の構造が複雑になればなるほど、文法通りに理解する必要があり、その知識が必要になってくる。それが正しく英語を理解&発信することにもなる。

これまで自分も振り返ってみれば、英文法はまさに「プラモデルの説明書」的存在だった。いろいろ調べて、時間をかけて確認しながら覚えてきた。しかし今では、英文法と語彙は悪の権現のように英語教育批判の槍玉にあがっている。「英語嫌いを作る」「英語を勉強してきたのに英語が話せない」要因の急先鋒に上がるのは、常に英文法学習と語彙学習である。新学習指導要領がスタートし、コミュニケーションや発信力を重視する授業がますます求められ、増えていくことは間違いない。教科書の内容も文法分野は簡潔化、近年の英語教育に導入され始めている CLIL(内容言語統合型学習) 授業でも、Usage-Based Model の考え方にに基づき、内容に興味をもって、言語に触れながら文の仕組みに気付ける工夫がされている。いかに苦手意識をもたせることなく文法を学ばせるかという時代になりつつある。

英文法がすんなり身に付く魔法のメソッドになりつつある。すばらしいことだ。文法学習がだんだん影を薄め、必要性も話題にも上らない時代が来るのかもしれない。

しかし、一方で、気になる指摘もある。

—大学生、大学院生を指導している教授より—

今の大学生、さらには大学院生でもそうなのだが、英文を読む時になんとなくこんな感じかなというぼんやりとした読み方しかない。文の構成をしっかりと詰めて考え、きちんと理解して解釈するというのをしない。つまり広い意味での「文法」に注意を向けないという傾向が一般的に強く感じられる。学生・院生に聞いてみると自分自身でそのように自覚している場合もある。それはコミュニケーション重視ということにより、発信する姿勢が大事で文法的な誤りに目くじらを立てるべきではない、という考え方が行きすぎ、「細かい」ことに注意を向けることがおろそかにされている。

剽窃が不正行為であることは言うまでもないが、学生や院生が剽窃を行って書いたレポートや論文読めば、どの部分を自分で書き、どの部分をどこからそのままコピーアンドペーストしたかは、すぐにわかる場合が多い。なぜなら、自分で書いた英文

と論文からコピーした英文とでは、英語の質的レベルがまったく違うからである。逆に言えば、学生はその英語の質的な違いを自分でわかっていないし、レベルの差がわかるだけの英語の力を身につけていない。

しっかりした文法力・知識がなければ、翻訳ツールで検索した英文（和文）のミスリードに気付かないケースも出てくるだろう。

より高いレベルでのコミュニケーション能力、発信能力を目指すのであれば、文法・語法の正確な理解がどうしても欠かせないし、4技能に関しては基盤となる文法的な知識がしっかり定着していなければ、いずれの技能においても高度なレベルに達することは期待できないだろう。また、生徒の論理的思考能力や分析思考能力は年齢と共に高くなるので、それに応じた指導法が求められ、生徒には丁寧に整理・定着させていく必要が出てくると思う。

新『高等学校学習指導要領解説外国語編・英語編』を読むと、

文法とコミュニケーションをどのように一体的に指導するかについては、その重要性を説く割には具体性に乏しいと思う。コミュニケーションの視点から文法をどう学べばよいのかという考えが新指導要領全般を通じて私には十分には感じられない。

生成 AI だったら、どんな回答が返ってくるのだろうか。聞いてみたい。